**寄　稿**

**日本というエキゾチシズム**

**大道　千穂**

　第二回国際アイリス・マードック学会が英国サリー州のキングストン大学で開催されてから、まもなく一年半が経とうとしている。ペーパーを読むわけでもないというのにこの学会に参加する気になったのは、最近になって自分自身のマードックへの視点がすっかり固定されてしまい、研究の展開が難しくなってきたことを実感していたからである。多くの国から集まる研究者たちによる最新の研究に触れることが自分自身の研究を展開するきっかけになるかもしれないという期待が、私を九月のイギリスへと誘ったのだった。

　オックスフォード大学のヴァレンタイン・カニンガム教授の講演で始まったその学会には多くの著名な研究者が出席していた。今まで何度となく参照した文献の著者たちが一同に会した会場風景に一瞬ひるんだものの、日本のアイリス・マードック学会と同じような、にこやかで和気あいあいとした会場の空気がすぐに私の緊張を溶きほぐしてくれた。参加者は研究者のほか学生、マードック・ファン、マードックの友人たちと実にさまざまであったため、頻繁に設けられていたティータイムにはアカデミックな話題からパーソナルな話題まで、マードックという一人の作家を軸に実にさまざまな会話を楽しむことができた。

　この学会で私はまったく予期しなかった歓迎を受けた。「第一回大会、第二回大会を通じて日本人の参加者はあなたが初めてです」、という言葉とともに最初に私に言葉をかけてくれたのは、米国ボール州立大学の英文科助教授、シェリル・Ｋ・ボヴ博士であった。「日本のマードック読者に会う機会があったらいつか聞いてみたいと思っていたことを、今あなたに聞いてもいいですか？」と彼女は言葉を続け、こう言った。「『切られた首』(A Severed Head) でオナー・クライン (Honor Klein) が日本刀を振り下ろす場面があるのを覚えていますか？あの場面での刀の扱い方は、日本人読者からみて自然なものなのか不自然なものなのかということを私はずっと知りたいと思ってきたのですが、どうでしょうか」。私は自分の記憶の糸を必死で手繰り寄せたが、オナーが日本刀を振り下ろすそのシーンに違和感を覚えたという記憶はなかった。というより、日本刀の「自然な」扱いがどういうものかということを考えたことすら私には一度もなかったことに、そのとき初めて気づいた。そしてこう答えるしかなかった。「日本人としてそのご質問に今すぐにお答えすることができなくて大変恥ずかしいのですが、少し時間をいただけますか？日本刀は私たちの世代の多くの読者にとって、おそらく欧米のみなさんにとってそうであるのと同じくらい、エキゾチックなものなのです。あまりにエキゾチックで、実は今ご指摘を受けるまで、マードックは私の国に伝統的な道具をいかに取り扱ったのだろうか、という視点をまったく欠いていました。帰国してから日本刀について少し調べたうえで、ぜひそのことについて考えてみたいと思います」。

　この学会は研究発表の場であると同時に、キングストン大学におけるアイリス・マードック研究センターの始動を祝う会でもあった。センターの中心は、熱心な募金活動の末に同大学が数年がかりで手に入れたマードックのオクスフォードの自宅にあった蔵書である。学会開催期間中、参加者は全員このセンターを見学し、心ゆくまでマードックの蔵書を手に取り、眺めることを許された。そこで私は再び、一緒に居合わせた人々の期待と羨望の入り混じった眼差しを浴びることになったのである。マードックの蔵書の中に驚くほど多くの日本関連の資料があったからだ。「あなたはマードックがこんなに興味を持った国の文化を知っているのだから、私たちにはわからないマードックの小説世界がわかるのね」。こんな言葉をたくさんかけられ、また実際そうした蔵書をぱらぱらとめくってみて、私は目の前の視界が突然開けたような不思議な感覚にとらわれた。友人になったひとりの研究者が声をかけてくれた。「あなた以外の誰がその本を使ってマードックの新しい魅力を伝えることができる？ぜひ研究してね。あなたの研究成果をきっと多くの人が待っているわ」。

　マードックを追い求め、私はこれまで必死になって西欧文化、西欧哲学を紐解こうとばかりしてきた。しかし研究のテーマは案外身近にあったようだ。イギリスの学会で、日本というエキゾチシズムに私は出会った。